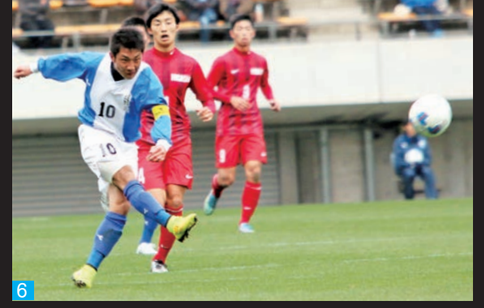
第94回全国高校サッカー選手権ダイジェスト

大会優勝校の東福岡を相手に死力尽くした遠野イレブン

3大会連続出場を果たした夢の舞台。
遠野は、高総体と選手権の2冠を達成した福岡県代表・東福岡と初戦で激突。
最後まで諦めない全員サッカーで死力を尽くすも、0対3で敗れた。

最後まで、必死にボールを追った―。



1_気合いが入るスターティングメンバー　2_堅い守備の間隙をぬってMF岩渕弘人(3年)が切り込む　3・4_遠野の守備陣は、両サイドをえぐる強力な攻撃に体を張って耐えた　5_円陣を組み気合いを入れるイレブン　6_ロングシュートを放つFW須藤和輝(3年)。惜しくも入らなかった　7_遠野の守護神・GK菊地将大(2年)は好セーブを連発　8・9・10_歯を食いしばってボールを追い続けた　11_ベンチ入りできず応援に回った部員も、心を一つに戦った

SOCCER DIJEST

94th ALL JAPAN HIGH SCHOOL SOCCER TOURNAMENT　"TONO vs HIGASHIFUKUOKA"

夢の舞台に3年連続25回目の出場を果たした遠野イレブンは、最後まで走って、走って、走り続けた―。

第94回全国高校サッカー選手権大会は昨年12月30日から1月11日までの7日間の日程で行われ、埼玉スタジアム2002などで熱戦が繰り広げられた。同校は31日、千葉県のフクダ電子アリーナで、高総体と本大会の全国2冠を達成した福岡県代表の東福岡と初戦で激突。王者を相手に持てるすべての力を出し切ったが、0対3で敗れ、県勢8年ぶりの初戦突破はかなわなかった。

遠野の戦略は明快だった。堅守で東福岡の強力な攻撃を耐え忍び、カウンター攻撃で少ないチャンスをものにするというもの。遠野伝統のスタイルだ。前半はDF小水内佳紘(よしひろ)(遠野中出身、3年)を中心に5バックを採用。両サイドをえぐる多彩な攻撃に、体を張って守った。しかし、前半12分、相手の精度の高いコーナーキックから、先制を許してしまう。その後、FWで主将の須藤和輝(かずき)(3年)がロングシュートを放つなど、惜しい場面もあったが、0対1のまま折り返す。

後半は、攻撃に打って出るべく、県大会決勝2得点のFW佐々木琢光(たくみ)(2年)らを投入。相手ゴール前に何度も攻め入るが、高さのある相手の守りに阻まれ、なかなかシュートまで持ち込めなかった。後半4分にコーナーキックから追加点を許し、東福岡のペースに。GK菊地将大(しょうだい)(2年)が好セーブを連発するなど、粘り強い守備を見せたが、10分には決定的な3点目を決められた。体格差、個人技ともに勝る相手に、遠野イレブンは必死に食らいつき、最後まで必死にボールを追ったが、無情にもそのまま終了のホイッスルは鳴った。

決して諦めず、夢の舞台を全力で走り切った遠野イレブンに、サポーターからは温かい拍手が送られた。

優勝校との差は、たった3点だ。これは、決して越えられない壁ではない。3点差を埋めることができた時、遠野は全国の頂点に立つ。先輩の涙を見た後輩たちは、この悔しさをバネに、一回りも二回りも大きくなって、夢の舞台に帰って来ることだろう。

遠高サッカー部の挑戦は、まだまだ終わらない。

INTERVIEW

前主将・FW
須藤 和輝(かずき) 君
(3年、山目中出身)

王者を相手に、チーム一丸となって全身全霊を尽くして戦った。負けはしたが、胸を張りたい。地域との絆が深い遠高サッカー部での3年間は自分の宝だ。今後の人生の糧にしたい。

DF
小水内 佳紘(よしひろ) 君
(3年、遠野中出身)

相当準備したが、それでも東福岡は強かった。後輩たちには、「止める、蹴る」の基本に立ち返り、全国を意識した練習に臨んでもらいたい。そうすれば高い壁も越えられるはずだ。

現主将・MF
千田 夏寅(かい) 君
(2年、ヴェルディ岩手出身)

大会王者の強さを肌で感じ、良い刺激になった。今回出場した2年生は6人。悔しさを忘れず、全国での経験を日々の練習に反映させていきたい。チーム力に磨きをかけ、次こそ勝つ。